

『未来の東京』戦略（案）への意見

東京アート&ライブシティ構想実行委員会

東京都が検討している「未来の東京」戦略ビジョンにおいて、2040年代の東京ビジョン「楽しい東京」でビジョン18「文化とエンターテインメントで世界を惹きつける東京」の方向を示し、2030年代に向けた戦略15で「文化とエンターテインメント都市戦略」を明確に打ち出したことに賛意を表します。

・戦略15について

「観光・文化戦略を再構築し、一層世界を惹きつける東京へ」とのキャッチフレーズについて展開について政策展開の筋道が逆転しているのでは無いかと考える。

東京には全国で最も豊かで多様な文化芸術資源が集積している。その創造活動は全国に波及し、また、全国からその享受、鑑賞に訪れる人も多く、大きな交流人口を生み出している。しかしながら今、新型コロナウイルス感染拡大により大きな打撃を受けており、その再生に向けて手を打たなければならない。

一方、一昨年の観光庁調査によると、世界からの東京の文化芸術についての認識度はまだまだ低いとの結果が出ている。

また、「未来の東京」を描く、「東京の強み」を伸ばし、「弱み」を克服する、に示されている「インバウンド向け観光資源、芸術文化発信力が不足」との認識を「コロナからの再生」の意味を込めていただきたい。

よって「都内の身近な観光資源の磨き上げ」との言及では無く「都内の多様な文化芸術資源を磨き上げと観光資源として活かす」と展開を整理すべきである。戦略15「文化とエンターテインメント都市戦略」としては「文化戦略を強化し、観光資源として一層世界、全国を惹きつける東京へ」とすべきである。

その上でサブ項目の順番を入れ替えることが必要である。

1. 芸術文化・エンターテインメントがあふれる日常を取り戻す仕掛けを打つ
2. ポストコロナを見据えたオールジャパンでのプロモーションを展開する
3. 「新しい日常」における観光スタイルを確立する

・基本戦略2に関連して、戦略15について

基本戦略2には「民間企業等、多様な主体と協働して政策を推し進める」とあり、民間の芸術団体、劇場として積極的に協働していきたいと考えている。この観点から戦略15で示されている連携の解説図に違和感を思えます。

それは、都立文化施設をコアに国立、区市町村、民間施設、芸術系大学とならんで「アートNPO」が示されおり、この概念では芸術文化の担い手としてかなり狭く幅広い協働は生まれないと考える。「文化芸術団体等」とすべきである。これは項目6と8に見られる。

私ども東京アート&ライブシティ構想実行委員会では、すでに築地・銀座・日比谷の歌舞伎座、観世能楽堂、帝国劇場、国立劇場など（15）、ギャラリー（37）、映画館（5）国立映画アーカイブなどが連携し、日本固有の能楽、歌舞伎からオペラ・バレエ、クラシック、ミュージカル、演劇、宝塚、そして古美術、洋画、日本画、現代美術、映画などこの地から全国に世界に文化芸術を発信する東京アート&ライブシティプロジェクトが2018年よりスタートしている。観光客、来街者に多様で豊かな文化・芸術を効果的に提供することが可能であり、文化芸術面での東京のさらなる価値向上に貢献することができる。世界に類を見ない多様な芸術集積として、世界への日本、東京の顔となる可能性を秘めており、このような連携をさらに磨くことが重要と考える。

(www.artandlive.net)

・2040年代の東京ビジョン：楽しい東京「「区部中心部の主な拠点の将来像」について「区部中心部の主な拠点の将来像」に、「築地」だけが示されているが、文化芸術集積が形成されている「築地・銀座・日比谷」地区を「大手町」「丸の内」「有楽町」と並んで文化芸術、食、ショッピング、国際会議場などの拠点と位置づけるべきである。

文化芸術面から実りある「未来の東京」ビジョンを推進、実現するため、東京アート&ライブシティ構想実行委員会の専門家が積極的に参加し、貢献する用意がある。